

美術教育の方針(五)

黒田清輝

▲日本の風土は美術に適す

日本の土地は山嶽溪流に富み、四圍の海濱は皓潔なり、順和の天候は花卉草木の生育に適し、至る所の肥田沃野は國民の生計を簡易にして、世路の艱險を知らざらしむ、之を西歐の天地に比すれば、宛然たる樂境なり、此の如き國柄は美術の培養に適當の要素を有して古來一種の藝術開け、歐洲の藝術と其趣を異にし、世に賞賛せらるゝも宜なり、就中繪畫は最も奇拔なる趣味を存し其技法は練熟したり、東洋の一孤島たる日本が、歐洲に多少の勢力を及ぼしたるものは、國力の富強なるが故にあらず、歐化の速かなるが爲にもあらず、全く此奇拔なる一種の藝術あるが爲なり、されば此藝術を衰頽に陥らしめず、益々之を開發して國光を揚ん事は、國民の等く希圖せざるべからざる所なり、然るに現今の状態を察するに徒らに其美術國なるを恃みて漫然我繪畫は世界の特技たるを誇るも之が發達の道を講ずるに冷淡にして、今の美術は枯涸自滅の悲境に瀕したるを奈何せん、

日本の繪畫は、其技法を唐宋に學びたるも我國に移植して一種の方法に發達したるが近代外國交通の始りてより新に起りたるは四條、圓山の所謂寫生派なり、此派の天然を究めたりし結果は花鳥畫の技巧に一種の進歩をあらはしたりといふべし、明治年代に入り歐洲の文物移入せらるゝや、洋畫の技法模倣せらるゝに至りて、繪畫は茲に其本據を失ひ亂雜名狀すべからざる觀を呈したり、今之を現時の實況に徴すれば、畧下の如きものあり、

▲方今の現状

従來の繪畫を作るものに二派あり、舊派は古法を墨守するものなるを以て、其畫風ハ沈着したりと雖、現今の時勢に適せず、其技は日を追ふて退縮し、古人の開きたる範圍以外に天然の情趣を敍し、若くは自己の思想を表するの能力を失ひたり、新派は世變に應じ開發を謀らんとするものにして、其主義は賞すべく其製作に見るべきものありと雖、修養の道を誤るを以て、完全なる成功を見るべき望なく、動もすれば奇狂に奔るの弊に陥る、洋畫を學ぶものにも亦二派あり、一は唯洋風の外形を模倣するものにして天然を寫すことを爲さず、一は天然を主として進むものにして、其方法は將來に向て望あれども未だ想を寫す程の熟したる技能なきが故に世人を満足せしめざるなり以上を概言するに、方今の藝術は或は古人の筆法雄快なるに感じて時代の變遷を忘れ或は洋畫の變化自在なるに驚きて其理を究むるを知らず、或は理想の重んずべきを知りて之を描くの手段を講ぜず、或は眞を寫すに勉めて想を寫すの域に達せず、斯く種種なる方向を模索したれども世は既に藝術の萌芽を生せんとするの時期なれば、此際確乎たる將來の方針を講究して其進路を開かんこと極めて切要なるを認むるなり

『二六新報』明治三十三年三月二十九日